

# 地中海政策をめぐる個別的利害と 地中海貿易

—— フランスのケースを中心に ——

棚 池 康 信

## I はじめに

地中海政策をめぐる諸問題はいくつかのポイントに要約できるが、EECの直面している最大の矛盾は、この地域のEECにとっての政治・経済的重要性が極めて高いにもかかわらず、EEC各国の利害が必ずしも一致しないことにある。政治統合に見るべき成果のない現状では、この矛盾の地中海政策に対する制約要因としての意義は大きい。

この場合に利害の対立というのは、まずは、地中海諸国との経済的諸関係にみる各国の個別的利害の食い違いである。この個別的利害を形成するものはさらに、国内（域内）市場レベルの問題と対外関係におけるものとの区分される。前者は国内（域内）市場における競争の激化をめぐる問題であり（EECの輸入面）、ここにおける利害対立は、各国の産業構造と各産業の競争力の相違に原因が求められる。後者は、各国産業の販路として、あるいは資源の供給源としての地中海地域、ないしはアラブ世界の重要性、依存度の相違に由来する。

もう1つ、EEC各国の利害の食い違いをもたらす要因は政治的関係である。それは、地中海地域内における様々な紛争と対立をめぐる表われる。この地域（特にマグレブと東地中海諸国）の諸問題がアラブ世界の問題との連動性を強めていることが、利害の乖離を大きくしている。

本稿は、地中海政策をめぐる各国の利害対立の構造を解明する第1歩として、地中海貿易の推移にみる、ドイツ、フランス、イタリアの3国の地中海諸国との関係の相違、さらには、フランスの地中海貿易の実態を明らかにせんとするものである。

## II EEC各国の対地中海貿易

### (1)地中海政策の貿易効果

#### —— E E C 各国別の比較 ——

##### 〔EECの輸出〕

1975年から77年にかけて調印されたグローバルな協定がE E Cと地中海諸国との貿易に与えたトータルな効果については、すでに前稿<sup>(1)</sup>において明らかにした。ここでは、フランス、ドイツ、イタリアについて、協定締結後の貿易のすう勢をみておく。ただし、今回は、1972～76年をベース・イヤーとする1980年の乖離をみている。

EEC全体として、協定締結後の地中海諸国への輸出がすう勢として上向していることは、すでに明らかにした。これを各国別にみると、地中海諸国への輸出すう勢が最も上向しているのはイタリアであり、次いでフランスが同程度の乖離度にある<sup>(2)</sup>（第1表参照）。ドイツの乖離値もプラスとなっはいるが、その水準は低い。これはすなわち、ドイツがベース・イヤーにおけるすう勢を持

---

(1) 拙稿「グローバルな地中海協定の貿易効果」『福山大学経済学論集』第9巻 第1・第2合併号 1985。

(2) この表の示す乖離値は、1972～76年の期間における各国の対地中海輸出の構成比（対世界輸出に占める）のすう勢に、補外法によって直線をあてはめ、1980年における構成比の推計値を算出する。さらにその構成比によって1980年における輸出額を算出し、それを実際の輸出額から減じた値を実際の輸出額で割った値である。したがって乖離値がプラスであることは、ベース・イヤーにおけるすう勢に対して1977年以降1980年までの対地中海輸出の構成比のすう勢が上向いたことを意味する。

続させているにすぎないことを示すものであり、協定締結が効果を持たなかったことの表われといえよう。表には記してないが、イギリスもドイツとほぼ同様の傾向にある。この各国の動向の対照は、対アフリカ、対LDC貿易のすう勢と比較する時、さらに鮮明となる。フランスとイタリアは対アフリカ、対LDC輸出の乖離値の方も大きく、第3世界全体の販路としての重要性が高まっていることが明らかとなるが、そのすう勢に地中海諸国の寄与するところが大きなのである。ドイツ、イギリスの場合は逆で、先進工業諸国への輸出を相対的に上向させる傾向にある。

第1表 EECの対地中海輸出の乖離度(1980)  
(単位%)

	フランス	ドイツ	イタリア	EEC
北地中海	48.0	71.2	226.6	83.6
東地中海	280.1	126.9	126.4	137.9
マグレブ	126.8	-47.7	25.1	19.9
地中海計	93.8	29.2	117.9	62.9
アフリカ	70.7	-9.2	18.2	-6.5
LDC	59.6	-11.1	4.9	-2.0

(資料) IMF, DIRECTION OF TRADE.

さて、EEC各国の輸出すう勢は3つに区分された地中海各地域によって異なる乖離傾向を示している。EECの輸出が著しく上向しているのが東地中海諸国への輸出である。このすう勢は各国に共通した特徴であるが、フランスの乖離値が特に大きい。次いで乖離度の高いのは北地中海に対する輸出である。この場合にはイタリアの乖離値が特に大きく、フランスがそれに続く。マグレブに対する輸出は、乖離値が小さく対EEC貿易全体としては協定締結の影響が小さかったという結果になっているが、これはフランスの上向きのすう勢がドイツの後退によって相殺されたものである。フランスの対マグレブ輸出の乖離値は、輸出の絶対額が対東地中海輸出の4倍近いという事実には照らす時、決して小さ

いものではない。このように、地中海全体とEECとの貿易すう勢に差違があるだけでなく、地中海の各地域との関係にも異なるところがある。

〔EECの輸入〕

EECの地中海諸国からの輸入は、協定締結後の1977、78年の時点では、目立ったすう勢の変化がみられなかった<sup>(3)</sup>。しかし、輸入面においてもEEC各国別の乖離値の差異は大きい(第2表参照)。プラスの乖離値の大きいのが、イタリアの北地中海、東地中海諸国からの輸入である。この両地域とイタリアとの貿易関係は輸出入の両面においてすう勢を上向かせているのであり、地中海政策の影響が最も敏感に出ている部分といえる。

第2表 EECの対地中海輸入の乖離度(1980)

(単位%)

	フランス	ドイツ	イタリア	EEC
北地中海	16.9	2.0	76.2	18.6
東地中海	2.8	10.6	53.3	12.4
マグレブ	1.9	-34.3	-48.4	-22.3
地中海計	10.5	-11.7	16.0	3.3
アフリカ	-20.1	-41.3	-11.3	-33.3
L D C	-15.6	-33.7	-14.7	-38.1

(資料) 同、第1表。

これとは反対に、明白な後退現象のみられるのがドイツ、イタリアのマグレブ3国からの輸入である。地中海政策の実現に最も強い関心を示したのがマグレブ諸国であったにもかかわらず、1980年までの貿易の推移を見る限り、EECとの新たな協定はその貿易関係にさしたる影響を及ぼさなかったものといえる。ただフランスだけが、マグレブからの輸入においてプラスの乖離となっており、他のEEC諸国とのインタレストの差異を示しているが、その乖離幅は極めて小

(3) 拙稿「前出」参照。

さく、せいぜい協定締結前のすう勢を維持しているにとどまる。フランスの地中海諸国からの輸入には、総じて新協定の効果がほとんど表われていない。

しかし、以上のような対地中海輸入の停滞後退傾向は、対アフリカ、対非産油 LDC 輸入の乖離度と比較する時、いささかの再評価が必要となる。すなわち、第2表の数値をみる限りは、EECは第3世界全体からの輸入のすう勢を下向かせているのである。したがって、第3世界全体からのEECの輸入の後退傾向の中で、地中海諸国の占める比重は相対的に高まっているといえるのである。<sup>(4)</sup>

## (2) 地中海地域の市場分割状況

ここでは、先のようなEECと地中海諸国との貿易のすう勢が、地中海市場のEECによる分割状況、あるいは地中海諸国からの輸入に占めるシェアにどのような変化を生ぜしめたのかをみておく。

[ EEC の輸出 ]

第3表はEEC全体の輸出を100として、各国のシェアを示したものである。地

**第3表 EECの地中海諸国への輸出**

(EECの輸出を100とする構成比)

(単位%)

年	フランス			ドイツ			イタリア		
	1976	1978	1980	1976	1978	1980	1976	1978	1980
北地中海	18.0	18.9	19.8	33.5	33.5	32.1	17.7	17.4	18.9
東地中海	12.7	16.2	18.0	32.4	29.1	27.4	15.5	16.9	17.0
マグレブ	49.9	39.3	42.4	21.2	24.7	18.4	11.5	16.5	19.3
地中海計	23.6	23.1	25.0	30.6	30.3	27.7	15.8	17.1	18.6
アフリカ	35.0	36.1	34.3	22.4	21.9	21.2	7.9	9.2	11.1
L D C	21.0	21.2	20.9	30.8	30.4	29.5	12.3	12.7	13.2

(資料) 同、第1表。

(4)これは、すでに述べているごとく、あくまでもすう勢の変化なのであって、実際の構成比の1977~80年の変化とは必ずしも一致するものではない。

中海全体に対するインタレストの大きさを1976年の時点で比較すると、ドイツが最も大きく、イタリアが小さい。しかし、80年にいたるすう勢は、イタリアが急速にシェアを拡大し、フランスも拡大傾向にあるのに対し、ドイツのシェアは縮小傾向にある。この傾向を地中海の各地域別に比較する時、興味深い動向を示しているのは東地中海諸国である。この地域におけるドイツの後退とイタリア、フランスの進出が対地中海輸出におけるインタレストの変化を決定づけているものといえる。東地中海諸国の中にはイスラエルやトルコも含まれており、この地域を一括することには無理があるのだが、地中海政策との連動性を深めているアラブ世界の諸問題との一体性の強いこの地域の市場分割状況の変化は、極めて興味深い。

マグレブ諸国への輸出も基調は東地中海のケースと類似しているが、ここではむしろ、フランスとの伝統的絆の強固であることが印象的である。フランスのシェアは78年には落ち込んでいるが、80年には再び40%以上を占めることになる。

このような、ドイツとイタリア、フランスとの地中海貿易における対照的なすう勢は、対アフリカ、対非産油LDC輸出における各国のシェアとその変動に照らす時、その意味がもう少し明らかとなる。まず、フランスのマグレブ市場に対する支配力は、アフリカとの貿易関係と比較しても際立っているが、地中海地域全体としてみれば、アフリカにおけるインタレストの方が大きい。その中で、フランスのシェアの低かった東地中海諸国への急速な進出がみられたことの意味は大きいものといわねばならない。イタリアの場合には、対LDC貿易全般において競争力の低いことがわかる。したがって、地中海貿易の重要性は他の2カ国以上に大きく、また近年はその傾向を強めてきているのである。ドイツの地中海貿易におけるシェアは、すでに述べたように最も大きいわけだが、対LDC貿易との相対的關係をみる時、それは他の2カ国に比して決して高くはない。さらに、1978～80年の間の大幅なシェアの減少は、ドイツの第3世界貿

易の中では異例である。

第3表はEEC全体を100とする各国のシェアを示したものであったが、続いて第4表によって、各国の輸出の対地中海依存度をみておこう。ドイツの依存度が7.64→6.78%と最も低く、しかも低下傾向にあるが、これはEECの平均に近い。この依存度と比較する時、フランスとイタリアの対地中海輸出への依存度は高く、さらに、イタリアだけが10.48→10.77%と拡大傾向にある。

第4表 対地中海輸出の依存度

(単位%)

年	フランス		ドイツ		イタリア		E E C	
	1976	1980	1976	1980	1976	1980	1976	1980
北地中海	4.41	4.40	4.50	4.28	6.30	5.96	4.09	3.83
東地中海	1.42	1.51	2.00	1.39	2.53	2.03	1.88	1.45
マグレブ	4.90	4.28	1.14	1.12	1.65	2.78	1.65	1.74
地中海計	10.73	10.19	7.64	6.78	10.48	10.77	7.62	7.02
アフリカ	7.79	7.51	2.74	2.80	2.55	3.47	3.74	3.77
L D C	17.79	17.13	14.34	14.52	15.23	15.43	14.21	14.11

(資料) 同、第1表。

イタリアの高い輸出依存度を支えているのは、北地中海諸国に対する輸出であり、それがドイツとの差となっているわけだが、すう勢としてはこの地域への依存度は低下している。イタリアの依存度が高まっているのは対マグレブ輸出である。従来、イタリアのこの地域に対するインタレストは、地中海地域の中では最も小さかっただけに、イタリアのマグレブ市場への進出は注目される場所である。

イタリアとは対照的に、マグレブ諸国に対するインタレストの最も大きかったフランスは、その依存度を4.90→4.28%へと低下させており、北地中海の4.40%を下回るようになった。

[EECの輸入]

輸出と同様に、フランス、ドイツ、イタリアの3カ国がEECの地中海諸国か

らの輸入に占めるシェアを比較しておく（第5表参照）。3カ国がEECの輸入に占めるシェアは1976年の時点では輸出におけるシェアよりも低かったが、80年には同程度の水準にまで高まっている。

3カ国の比較においては、ドイツのシェアが最大でイタリアが低く、輸出面と同様の基調をみせているが、3カ国の格差は小さい。すう勢としても、ドイツのシェアは縮小傾向にあるのに対してイタリアとフランスは拡大傾向にあり、3カ国の格差はますます小さくなっている。

**第5表 EECの対地中海輸入**

(EECの輸入を100とする構成比)

(単位%)

年	フランス			ドイツ			イタリア		
	1976	1978	1980	1976	1978	1980	1976	1978	1980
北地中海	21.4	24.8	25.7	27.1	27.1	26.3	15.9	15.3	18.4
東地中海	13.2	12.7	10.9	26.8	29.3	25.2	16.5	15.6	28.5
マグレブ	32.0	32.7	31.2	31.6	30.2	31.8	18.3	18.5	14.4
地中海計	22.8	24.4	24.8	28.2	28.2	27.6	16.6	16.1	19.0
アフリカ	25.3	25.0	23.9	16.9	17.6	17.1	12.9	10.4	13.7
L D C	15.0	14.6	15.5	25.8	27.4	25.8	13.6	12.3	16.6

(資料) 同、第1表。

先の乖離値の分析によって明らかのように、地中海諸国からの輸入のすう勢を強く規定しているのは対北地中海輸入であり、加えてイタリアの東地中海諸国からの輸入である。つまり、北地中海からの輸入においては、ドイツの後退、イタリア、フランスの進出というすう勢が明白に表われているのである。地中海地域からの輸入が域内産業にとって大きな脅威となる可能性は、北地中海諸国からの輸入において最も大きいのであり、この地域からの輸入がフランス、イタリアに集中する傾向にあることの意味は大きい。逆に、マグレブに対する依存度は停滞ないし減少しており、この地域の輸出にとって地中海協定は、マイナスに作用しているものとさえいえる。

## 地中海政策をめぐる個別的利害と地中海貿易

フランスとイタリアにとって対地中海輸入が重要であることは、EECの対非産油LDCとの貿易における2カ国のウェイトを比較すれば明らかである。特にフランスの輸入の地中海への傾斜が著しい。それを支えているのはマグレブ諸国からの輸入であるが、北地中海諸国からの輸入が拡大傾向にあることは、すでに述べたとおりである。そのことの結果として、1980年には対地中海輸入におけるシェアが対アフリカの輸入を上回ることになっている。

対地中海輸入の重要性を各国別の依存度としてみると、第5表の示すところとはやや様相が異なる(第6表参照)。まず、ドイツの地中海輸入に対する依存度が、ほんのわずかではあるが高まっていることに注目しなければならない。先にみたドイツの後退という事実との食い違いは次のように説明される。すなわち、1976～80年にかけてドイツの輸入全体が停滞的だったのであり、その結果、ドイツにとって地中海からの輸入の重要性は変わりがなかったにもかかわらずEECの輸入全体の中では後退したものである<sup>(5)</sup>。したがって、ドイツのすう勢を地中海輸入の後退とするのは、相対的意味において理解しなければならない。

**第6表 対地中海輸入の依存度**

(単位%)

年	フランス		ドイツ		イタリア		EEC	
	1976	1980	1976	1980	1976	1980	1976	1980
北地中海	2.78	3.54	2.73	2.79	3.05	3.48	2.37	2.53
東地中海	0.49	0.42	0.77	0.74	0.91	1.49	0.68	0.70
マグレブ	1.87	1.96	1.43	1.54	1.58	1.24	1.07	1.15
地中海計	5.13	5.92	4.93	5.06	5.54	6.22	4.12	4.39
アフリカ	4.23	3.58	2.19	1.98	3.18	2.81	3.06	2.76
L D C	9.14	9.22	12.27	11.85	12.29	13.58	11.20	10.98

(資料) 同、第1表。

(5) 1976年を100とする1980年の指数によって輸入の伸びを比較すると、ドイツの187に対してフランスは205、イタリア209、EEC全体でも199となっている。

各国のマグレブ諸国に対する依存度の推移についても、その意味を問うておく必要がある。先に、マグレブからのEECの輸入における3カ国のシェアは停滞・縮少の傾向にあるとしたが、ここにみられるようにフランス、ドイツの対マグレブ輸入の依存度は、いずれも高まっているのである。これはつまり、マグレブのフランス、ドイツに対する輸出以上に他のEEC加盟国への輸出が伸びたため、EECの輸入に占めるシェアが後退する一方で、フランスの場合にはアフリカからの、ドイツは非産油LDC全般からの輸入の後退があったため、マグレブからの輸入依存度が相対的に高まっているのである。1976年以降のマグレブからの輸入にすう勢の変化の無かったことは、先の乖離値の分析において明らかにしたところであり、また、EECの第3世界からの輸入全般がすう勢を下向かせているという事実も確認されている。

### III フランスの地中海貿易の構造

〔フランスの輸出〕

#### (a) 1次産品輸出

フランスの輸出全体の特徴は一次産品、中でも食糧、飲料(SITC、0+1類)輸出の構成比が大きいことにある(第7表参照)。それはドイツ、イタリアの3倍の水準にある。しかもその構成比が、1976~80年にかけて22.2→23.5%へと拡大する傾向にある(0+1類は14.7→15.4%)。この間、最大の輸出項目である機械類(SITC、7類)の輸出は37.7→33.2%へと縮少している。

食糧輸出が先進工業国としては高いというフランスの輸出構造を支えているのは、何とんでも対EEC輸出である。しかしながら、食糧輸出への依存を高め、機械類が縮少するという特徴を生じさせているのが、EECをはじめとするOECD諸国との貿易関係ではないことに注目は向けられるべきである。EEC域内市場をフランス農業の基盤に据えるという戦略は、フランスがEECに対して有する最大のナショナル・インタレストであり、CAP(共通農業政策)は良きにつけ

第7表 フランスの輸出構造 (地域別商品構造)

(単位%)

SITC		0~9	0	1	2	3	4	5	6	7	8	一次産品 (除3)(含3)	
世界	1976	100.0	12.2	2.5	4.3	2.9	0.3	11.0	20.4	37.7	8.0	19.3	22.2
	1980	100.0	12.7	2.7	3.7	4.1	0.3	12.0	21.4	33.2	8.4	19.4	23.5
OECD	1976	100.0	13.5	3.1	5.9	3.9	0.3	11.6	20.8	31.3	8.9	22.8	26.7
	1980	100.0	11.9	3.2	4.9	4.7	0.3	12.1	22.4	29.8	8.8	20.3	25.0
EEC	1976	100.0	16.4	2.8	6.7	3.3	0.4	10.4	21.0	30.5	8.0	26.3	29.6
	1980	100.0	14.4	2.9	5.3	3.9	0.4	11.9	22.9	28.6	8.1	23.0	26.9
OPEC	1976	100.0	7.9	0.6	0.5	0.5	0.2	6.2	19.3	59.1	5.5	9.2	9.7
	1980	100.0	14.6	0.5	0.6	1.1	0.3	8.3	18.8	47.7	7.8	16.0	17.1
北地中海	1976	100.0	5.0	0.3	7.1	4.3	0.5	12.7	17.8	43.8	6.1	12.9	17.2
	1980	100.0	4.9	0.2	7.4	8.3	0.3	17.4	19.0	41.5	6.2	12.8	21.1
東地中海	1976	100.0	14.4	0.3	11.4	11.5	0.9	11.0	19.3	47.6	4.3	27.0	38.5
	1980	100.0	27.3	0.3	1.2	2.7	1.0	9.9	9.2	22.4	6.2	29.8	32.5
マグレブ	1976	100.0	6.0	0.2	1.8	0.5	0.8	8.5	21.6	55.3	4.7	8.8	9.3
	1980	100.0	10.2	0.1	2.4	1.1	0.6	12.1	20.5	47.4	6.1	13.3	14.4
地中海計	1976	100.0	8.0	0.3	3.9	2.2	0.7	10.8	19.7	49.4	5.2	12.9	15.1
	1980	100.0	7.5	0.2	3.6	3.8	0.5	11.4	14.3	32.4	5.1	13.8	17.6
アフリカ	1976	100.0	9.6	1.0	1.0	0.8	0.5	8.9	20.0	51.8	5.6	12.1	12.9
	1980	100.0	13.7	0.8	1.2	2.2	0.5	9.8	18.3	46.3	6.4	16.2	18.4
LDC	1976	100.0	9.6	1.5	0.8	0.5	0.4	9.1	19.1	52.1	6.2	12.3	12.8
	1980	100.0	13.8	1.6	1.0	2.0	0.4	10.2	18.8	43.4	7.9	16.8	18.8

(資料) OECD, TRADE BY COMMODITIES.

悪しきにつけ、EECの重要な展開軸であった。そのEEC農産物市場の拡大にかけりが表われ、フランス農業は重大な転機を迎えている。EEC向け食糧輸出の停滞状況は第8表の商品類別増加指数によって確認しうる。輸出増加指数の地域=商品マトリックスの中で、対EEC農産物輸出の指数は最低の部類に属しているのである。その契機となっているのは、言うまでもなく、CAPによる保護政策によって過剰生産状態に陥っているEEC農業の実態である。

第8表 フランスの輸出増加指数 (1980/1976)

SITC	0	1	2	3	4	5	6	7	8
世 海	210	213	172	285	192	218	209	176	208
O E C D	179	213	168	244	192	210	218	192	200
E E C	176	213	160	240	188	230	218	187	202
O P E C	363	175	213	410	315	261	190	157	272
北地中海	147	136	229	421	146	302	236	209	227
東地中海	490	292	276	606	270	233	124	122	373
マグレブ	287	94	222	376	125	231	160	144	219
地中海計	298	146	230	432	164	265	182	164	245
アフリカ	296	175	240	519	202	202	190	185	237
L D C	184	223	246	762	211	236	207	176	271

(資料) 同、第7表。

転機を迎えているフランス農業の転回方向は、明らかに第3世界に対する輸出の拡大である。1976年の時点で、各地域別にみて農産物(0類)輸出の構成比の最も高かったのはEECの16.4%であったが、1980年には、東地中海の27.3%、OPECの14.6%がEECのそれを上回っており、その他マグレブ、アフリカ、非産油LDCといずれも農産物の構成比が急速に高まっているのである。農産物輸出の第3世界市場への傾斜の実態はさらに、第9表の商品類別にみた輸出の地域構成によってその実態が明らかとなる。1976年にはフランスの農産物輸出の76.9%と68.7%を吸収していたOECDとEEC域内市場の比重は、1980年にはそれぞれ10%ポイントずつ低下している。その分だけ第3世界市場の重要性が高まっているのであり、OPECと非産油LDCを合わせた依存度は1980年には36.7%となっている。また、その中に占める地中海、アフリカ諸国の比重は大きく、<sup>(6)</sup>対第3世界輸出の7割に達する。EECの第3世界政策、とりわけ地中海、アフリカ政策に対する積極的な姿勢は、このようなフランス農業の現状によって1

(6) 北地中海諸国への輸出の大部分はOECD諸国に分類される。

第9表 フランスの輸出構造（商品類別地域構成比）

（単位％）

SITC		0～9	0	1	2	3	4	5	6	7	8
世界	1976	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	1980	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
OECD	1976	69.1	76.9	83.3	93.0	94.0	66.7	73.1	70.5	57.5	76.6
	1980	69.9	65.6	83.2	90.6	80.4	66.7	70.8	73.3	62.9	73.5
EEC	1976	50.9	68.7	54.3	78.2	57.8	59.3	48.1	52.3	41.2	51.0
	1980	51.0	57.7	54.2	72.6	48.6	57.9	50.8	54.6	43.9	49.5
OPEC	1976	9.1	5.9	2.2	1.2	1.7	5.3	5.2	8.6	32.0	6.3
	1980	8.9	10.2	1.8	1.5	2.4	8.7	6.2	7.8	32.0	8.3
北地中海	1976	4.8	2.9	0.7	7.8	7.3	6.6	5.6	4.2	5.6	3.6
	1980	5.3	2.0	0.4	10.4	10.7	5.0	7.7	4.7	6.7	1.7
東地中海	1976	0.8	2.4	0.2	0.5	0.8	5.0	2.1	1.9	1.1	1.1
	1980	0.9	5.7	0.3	0.9	1.7	6.9	2.2	1.1	1.0	1.9
マグレブ	1976	5.1	2.5	0.4	2.1	0.9	10.4	4.1	5.4	7.4	3.0
	1980	5.4	3.4	0.2	2.7	1.1	6.8	4.3	4.1	6.1	3.1
地中海計	1976	10.7	7.8	1.3	10.5	9.0	22.0	11.7	11.5	15.6	7.7
	1980	11.6	11.1	0.9	14.0	13.6	18.7	14.3	9.9	14.6	9.0
アフリカ	1976	12.8	10.0	4.7	3.1	4.0	18.0	10.4	12.5	17.6	9.0
	1980	13.3	14.2	3.9	4.3	7.2	18.9	10.8	11.3	18.5	10.2
LDC	1976	23.2	18.4	13.8	4.7	4.6	26.2	19.2	21.7	14.3	17.7
	1980	24.4	26.5	14.5	6.7	12.3	28.7	20.8	21.5	12.8	23.1

（資料）同、第7表。

つの視角が与えられる。

農産物と同様に、ワインの輸出入をめぐる諸問題も、地中海協定の締結交渉における難問の1つであったが、第7表にみられるように、飲料、タバコ（SITC、1類）の輸出の重要性はそれほど大きくなく、また第9表から明らかとなるように、その輸出市場としての第3世界の比重は高くない。ここでの問題はフランスにとっては、輸入品に対する国産品の保護という点にあるようである。

(b) 工業製品輸出

工業製品部門でのフランスの輸出において顕著な動きをしているのは機械類であり、この場合も変化の中心は第3世界市場にある。各市場別にみて、OECDとEECに対する輸出についても機械類のシェアがやや低下気味ではあるが、激しく変化しているのは対地中海輸出である（第7表参照）。この地域に対する輸出の50%弱を、76年には機械類の輸出が占めていたが、それが80年には32.4%へと低下しているのである。地中海の各地域別に比較すると、機械輸出の縮小化傾向は、工業の発展段階が比較的高い北地中海諸国よりも、工業化の低い段階にあるマグレブ、東地中海諸国においてより大きいことがわかる。同様の傾向は対アフリカ、対非産油LDC輸出においてもみられる。

商品類別にみた地域構成比としてみる時、この変化は、輸出市場の先進工業国市場への傾斜となって表われる（第9表参照）。機械類の輸出におけるOECDのシェアは1976年の57.5%から、80年には62.9%へと高まっている。他方、非産油LDCは14.3→12.8%と低下する。地中海諸国の中では、マグレブ諸国でシェアの低下が著しく、北地中海ではむしろシェアが高まるというすう勢の違いがみられる。また、OPECの場合は、機械輸出のシェアが減少するという、フランスの第3世界に対する輸出にみられる特徴を共有していないことに注目しておきたい。

その他の商品項目についてみると、原料別製品（SITC、6類）のすう勢は機械類と類似したものとなっている。すなわち、先進工業国への輸出において6類の比重が高まると同時に、商品類別にみた地域構成としては、OECD諸国の比重が70.5→73.3%と高まっているのである。化学製品（SITC、5類）と雑製品類（同、8類）では、それぞれの輸出における先進工業国市場のシェアが低下している。したがって、これらの商品分野では第3世界への輸出依存度が高まっているのだが、8類での依存度拡大が比較的LDC全体にわたっているのに対し、5類におけるLDCへの輸出拡大は地中海諸国、特に北地中海諸国へ集

地中海政策をめぐる個別的利害と地中海貿易

中する傾向にある。

〔フランスの輸入〕

(a) 1次産品輸入

輸入面でのフランスの特徴は、輸出におけるほど著しいものではないが、ほぼそれを裏返したものとなる。まず1次産品については、食糧品(0類)の輸入がドイツ、イタリアの10%前後に対して、8.5%と低いことが特徴として指摘

第10表 フランスの輸入構造(地域別商品構造)

(単位%)

SITC		0-9	0	1	2	3	4	5	6	7	8	一次産品 (除3)(含3)	
世界	1976	100.0	8.8	0.8	5.7	22.4	0.7	8.1	18.5	23.3	9.1	16.2	38.6
	1980	100.0	8.5	0.8	5.8	26.6	0.6	9.0	17.4	21.4	7.9	15.8	42.5
OECD	1976	100.0	7.9	0.9	4.2	5.0	0.5	10.9	24.0	32.6	11.0	13.8	18.8
	1980	100.0	8.0	1.1	5.3	7.6	0.5	11.7	23.0	30.6	9.7	15.0	22.7
EEC	1976	100.0	7.6	1.2	2.4	5.2	0.7	13.0	26.8	31.9	11.0	12.0	16.2
	1980	100.0	8.2	1.4	2.7	7.7	0.6	13.0	25.2	29.0	11.8	13.1	20.8
OPEC	1976	100.0	0.6	0.1	1.8	96.6	0.0	0.1	0.5	0.1	0.1	2.5	99.1
	1980	100.0	0.6	0.1	1.0	97.0	0.0	0.6	0.6	0.0	0.1	1.7	98.7
北地中海	1976	100.0	20.7	1.5	5.6	1.2	0.6	3.3	25.8	27.2	12.4	28.4	29.6
	1980	100.0	14.4	1.0	4.4	3.6	1.1	4.7	24.8	32.5	11.7	20.9	24.5
東地中海	1976	100.0	18.0	0.9	16.6	46.2	0.0	3.3	8.7	2.0	3.4	35.5	81.7
	1980	100.0	23.7	0.3	16.9	26.8	0.1	7.2	18.2	2.2	6.3	41.0	67.8
マグレブ	1976	100.0	21.3	1.6	9.9	52.3	0.9	2.2	3.3	0.5	6.4	33.8	86.1
	1980	100.0	12.9	1.3	9.6	60.1	1.9	2.4	2.9	1.2	8.5	25.7	85.8
地中海計	1976	100.0	20.6	1.5	8.6	24.1	0.6	3.0	16.2	15.1	9.2	31.3	55.4
	1980	100.0	14.4	1.0	7.0	23.4	1.2	4.1	16.7	19.1	9.9	23.6	47.0
アフリカ	1976	100.0	23.8	0.8	16.9	41.8	3.4	1.2	4.9	0.3	2.2	45.1	86.9
	1980	100.0	16.5	0.3	11.8	54.0	1.4	7.4	5.2	0.4	2.6	30.2	84.2
LDC	1976	100.0	10.7	0.6	8.3	67.9	1.2	0.7	4.4	0.9	2.6	20.9	88.8
	1980	100.0	10.3	0.3	6.8	67.9	0.8	2.8	5.2	1.5	4.0	18.3	86.2

(資料) 同、第7表。

## 地中海政策をめぐる個別的利害と地中海貿易

できる<sup>(7)</sup>。フランスの食糧品輸入の大部分は熱帯、地中海産品であり、穀物などの温帯産品に限るなら、フランスの特徴はもっと鮮明となる。

食糧品輸入の比重を各地域別に比較するなら、それが地中海、アフリカ諸国においては高いことがわかる(第10表参照)。原燃料を合わせた1次産品への依存度は、マグレブ、アフリカ諸国では80%を上回り、フランスにとってこれら地域が食糧、原燃料の供給源として重要であると同時に、地中海、アフリカ諸国の1次産品輸出におけるフランス市場のインタレストの大きさが明白となる。それ故になおさら、食糧輸出への依存度の高い地中海、アフリカ諸国からの輸入において、食糧のシェアが急速に縮小していることの意味は重大である。北地中海では20.7%→14.4%、マグレブは21.3→12.9%、アフリカは23.8→16.5%と、それぞれ5～10%の範囲でシェアが低下しているのである。

食糧輸入の後退する反面でシェアの拡大しているのは、北地中海諸国からは機械類(7類)、マグレブ、アフリカ諸国からは原油の輸入であるが、第11表

第11表 フランスの輸入増加指数(1980/1976)

SITC	0	1	2	3	4	5	6	7	8
世界	201	205	216	250	166	234	197	193	221
OECD	203	229	251	309	196	216	189	189	211
E E C	211	233	217	286	185	193	177	177	201
O P E C	216	158	118	222	493	2055	795	795	814
北地中海	172	175	196	715	419	346	238	295	231
東地中海	178	43	138	79	172	303	282	149	256
マグレブ	141	177	224	267	503	255	202	487	304
地中海計	162	164	189	226	457	318	239	395	247
アフリカ	176	112	177	327	104	1471	272	300	290
L D C	219	113	188	227	159	890	378	378	346

(資料) 同、第7表。

(7) 構成比は、1980年のものである。

によってその伸び率を比較しておこう。ここにみられるように、北地中海諸国からの機械輸入やマグレブ、アフリカ諸国からの原油輸入の伸びは決して低くないが、それらの項目における他の地域の伸び率と比較すると、それが必ずしも特徴的現象であるとはいえない。むしろ、食糧輸入の伸びの絶対水準の低いことの方が特徴的である。食糧輸入は対世界の増加指数も201と高い方ではないが、地中海諸国からの輸入が162と特に低く、中でもマグレブは数量ベースではほぼ停滞状態となっているのである。新協定の無効性を主張する重要な根拠がここにある。

このように、地中海、アフリカ諸国からの輸入における食糧品のシェアの低下は、食糧輸入全体の停滞に加えて、この地域からの輸入が特に抑制されたためであったのであり、その結果は、フランスの食糧輸入における地中海、アフリカ諸国への依存度の明白な後退となって表われている（第12表参照）。

飲料についてもほぼ同様の結果となっている。食糧と同様に、全体としての輸入の増加指数が205と低いことに加えて、OECD、EEC諸国からの伸び率が高い。輸入依存度をみると、OECDが78.4→87.4%、EECが69.3→78.5%と水準を高めているのに対して、地中海諸国からの輸入は10.4→8.3%と依存度を低めているのである。

#### （b）工業製品輸入

工業製品輸入におけるフランスの特徴は、化学製品と（5類）機械類（7類）の輸入の比重がドイツ、イタリアと比べて高いことにある。しかもその部門において輸入増加指数の大きいのが対第3世界輸入であることが注目される（第11表参照）。

5類において増加指数の大きい地域はOPECとアフリカ諸国であり、1976～80年の4年間に実に15～20倍の規模に拡大している。地中海諸国からの輸入も3倍に拡大しており、特に北地中海諸国からの輸入の伸びが大きい。この部門は、石油精製基地の建設という形でのオフショア生産の拡大している部門であり、フランスに対して化学製品の輸出させている地域の工業発展段階を考えるなら、

第12表 フランスの輸入構造（商品類別地域構成比）

		0	1	2	3	4	5	6	7	8
世界	1976	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	1980	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
OECD	1976	62.5	78.4	52.0	15.5	51.5	93.4	89.9	97.1	88.1
	1980	63.1	87.4	60.4	19.2	60.6	86.5	88.2	95.3	83.9
EEC	1976	42.7	69.3	21.3	11.7	44.1	79.7	72.1	68.0	65.3
	1980	44.7	78.5	21.4	13.4	49.0	66.0	66.6	62.3	59.2
OPEC	1976	1.3	2.0	5.7	76.4	0.3	0.1	0.5	0.0	0.0
	1980	1.4	1.6	3.1	68.0	0.9	1.2	0.6	0.0	0.1
北地中海	1976	7.7	5.7	3.2	0.2	2.6	1.4	4.6	3.8	4.7
	1980	6.5	4.9	2.9	0.5	6.7	2.0	5.5	5.8	4.9
東地中海	1976	1.8	1.0	2.6	1.9	0.0	0.3	0.4	0.1	0.4
	1980	1.6	0.2	1.7	0.6	0.0	0.5	0.6	0.1	0.4
マグレブ	1976	4.6	3.7	3.4	4.5	2.2	0.5	0.3	0.0	1.4
	1980	3.2	3.2	3.5	4.8	6.6	0.6	0.4	0.1	2.0
地中海計	1976	14.1	10.4	9.2	6.5	4.9	2.2	5.3	3.9	6.5
	1980	11.4	8.3	8.1	5.9	13.4	3.1	6.5	6.0	7.3
アフリカ	1976	19.4	3.1	21.4	13.4	31.3	1.1	1.9	0.1	1.9
	1980	16.9	3.9	17.6	17.6	19.7	7.2	2.6	0.2	2.5
LDC	1976	31.8	18.9	38.0	79.3	39.9	2.3	6.3	1.1	7.9
	1980	34.5	10.3	33.0	72.0	38.1	8.9	8.6	2.1	12.3

（資料）同、第7表。

5類の輸入動向は、フランスの石油化学工業の産油国への展開を裏付けるものと考えらるべきであろう。ただ、この部門ではフランスの第3世界に対する輸出の伸びも大きいことはすでにみたとおりである。この相互貿易の拡大という現象の意味については、より詳細な国別、商品別の分析の余地が残されている。

7類の動向も注目されるところである。この部門でも第3世界からの輸入が拡大しているが、先の化学製品の場合には、輸入の伸びが産油国を中心にLD

C全体からのものであったのに対し、機械類では輸入拡大の中心が地中海諸国にある。<sup>(8)</sup> もっとも、地中海諸国の中で増加指数が最も大きいマグレブからの輸入水準は極めて低く、北地中海諸国からの輸入が大部分を占めている。

機械類では輸出の減少が著しいことは、先にみたとおりであり、輸出入両面での動向が示しているのは地中海地域における輸入代替工業化の進展である。この問題についても、より詳細な商品別の分析、並びに地中海諸国に形成されている機械部門の輸出生産力がどのような性格のものであるかを究明する必要がある。ただここでは、次の点を指摘しておくことはできる。地中海諸国のフランスに対する輸出において比重の高いのは、石油を除けば、食糧（0類）と原料別製品類（6類）なのである。食糧の伸びが低いことはすでに述べたが、もう1つの輸出品目である原料別製品類も、工業製品の中では最も増加指数が小さいのである。にもかかわらず、工業の発展段階としては高次に位置する石油化学製品や機械類の輸出が増加しているわけであるから、それを地中海地域における国民経済的発展の延長上に現われたものとして捉えることはできないであろう。

#### IV むすび

本稿では、ドイツ、フランス、イタリアという、EECの地中海政策に対して重要な影響力を持つ3国の、地中海地域との貿易関係におけるインタレストの差異を明らかにせんとした。結論的には、ドイツのこの地域からの後退とフランス、イタリアのインタレストの拡大という明白な差異が表われている。

ドイツのこの地域における存在は、現状では依然として最も重要であるわけだが、それはドイツにとってこの地域が重要であるというよりは、フランスの約2倍、イタリアの約3倍というドイツの輸出力を反映するものに他ならない。各国ごとの地

---

(8) 増加指数としてはOPECが大きい、その輸入水準はネグリジブルなものにすぎない。

地中海地域に対するインタレストの比較では明らかにフランス、イタリアのそれの方が大きく、しかも、それは拡大する方向にある。すなわち、第1節でみたように、貿易のすう勢としてはフランスとイタリアが対地中海貿易の重要性を高める傾向にあるのに対して、ドイツのすう勢は下降気味である。さらに、市場分割状況と輸入依存度の推移をみても、イタリアの急速な進出とドイツの縮少傾向は好対照を成し、フランスはその地位を維持しているのである<sup>(9)</sup>。さらに重要な事実、フランスとイタリアは、その世界市場との関わり全体が第3世界への傾斜を強め、地中海地域との関係の深まりはその一環を成すものであるのに対し、ドイツは第3世界との関係全体が後退気味なのである。この事実は、地中海諸国をめぐる両者のインタレストの乖離が、単に地中海地域をめぐる問題にとどまらないことを意味するものである。

フランスとイタリアが地中海地域との貿易関係を深めていることが、地中海政策にとってどのような意味を持つのかは必ずしも明確ではない。一方において、地中海、アフリカへ向かって市場関係が拡大してゆくことは、この地域との政治的関係深化を促す契機となるであろうが、他方において、共同市場的諸関係が地理的に広がるにつれて、政治、経済的にセンシティブな問題領域は広がってゆくのであるから、そのプロセスは必ずしも直線的なものとはならないのである。

このような貿易関係の変化の中で、従来からこの地域に対して最も強い政治、経済的インタレストを有しているフランスの、地中海貿易の商品構造の変化についても本稿では概観している。そこにみられるフランスの貿易構造の変化は、かなり明確な方向性を持っているようである。その方向とは、フランスが食糧品を中心とする1次産品の輸出を拡大し、地中海諸国が化学製品や機械類を中心に

---

(9) 前稿においても明らかとなっているように、地中海諸国からの輸入面は必ずしも関係の深化を示してはいないが、先にも述べたように、それはEECの対第3世界輸入全体の縮少という要因に規定されるものであって、第3世界輸入の中であって地中海地域の重要性は相対的には高まっているのである。

工業製品輸出を拡大するという、一見すると奇妙な分業関係の進展に表われている。この実態の意味を解明することは本稿の課題ではないが、少なくとも次のような解釈が可能ではなかろうか。すなわち、フランスは地中海からアフリカに広がる共同市場的市場圏を、一方においては過剰生産状態にある自国農業の販路として位置付け、他方においては資本の国際的な生産、立地戦略の場として確保せんとするものである。地中海協定においてセンシティブな問題を提供した部門を多く含む原料別製品類（SITC、6類）では、地中海諸国からの目立った輸入の増加がみられないことは、その意味では重要である。さらに言うなら、そのような方向性と合致する範囲において地中海政策も可能となるということである。